

京都市立芸術大学長
中西 進（なかにし すすむ）



作家
神津 カンナ（こうづ）



国立国語研究所長
甲斐 睦朗（かい むつろう）

国際的視野で日本の古代文学と文化、精神史を探求する中西進さん、
国立国語研究所「外来語」委員会など公的機関の委員としてもご活躍の神津カンナさん、
現在、中央教育審議会国語専門部会の主査としてご活躍の甲斐睦朗さんに、
今求められる「国語の力」について語っていただきました。

鼎談 幹が太くなれば、木は高くなるのです

もっと子どもの言語力を信頼していい

神津　わたしの友人が、この四月から大学で英語を教え始めたのですが、まず、学生に辞書は何を使っているかと聞いたら、シャープです、カシオです、セイコーですと手を挙げたというのです。彼女は一瞬、彼らが何を言っているのかわからなかった。結局、みんな電子辞書を使っていて、そのメーカーの名前を言っていたんですね。

彼女はそれ以来、クラスの中では普通の辞書を使わせているのですが、笑うほど辞書の引き方が下手なんだそうです。電子辞書はピンポイントで探すでしょう。当たりをつけてものを調べるという感覚が、彼らから失われているのではないかということを言っていました。

甲斐　学校教育の間は電子辞書を禁止するというのにわたしも賛成ですね。

ある小学校の研究授業でこんなことがありました。教材文の中に「上きげん（上機嫌）」という言葉が出てくるのですが、授業中に突然、一人の女の子が手を挙げて、「上機嫌の『上』というのは、とてもよいという意味だと思います。でも、『上』のついたほかの言葉がわかりません。みなさん教えてください。」と質問をしたのです。そうしたら、ほかの子どもたちが机の上の辞書をさっと引きだしたのです。

神津　紙の辞書ですね。

甲斐　それが訓練を受けた学校の子どもたちの姿だと思うのです。辞書の引き方もたいへん早く、非常に感動的でした。訓練を受けた教室の子どもほど言葉への関心度が高い。ですから、「今どきの子どもたちはだめ」ということではなくて、学校教育のあり方そのものに比例しているのです。

神津　家庭での影響も大きいと思います。ある消費者センターの方のお話ですが、ここ何年か、かつての自分なら思いもよらなかった答えを電話の向こうにいる子どもの親たちに返していることがある、というのです。

甲斐　なんと答えているのですか。

神津　「食べ物を食べてください。」だそうです。「娘の様子がおかしいから、どんなサプリメントを飲ませたらよいか。」「こういうドリンクはどうか。」という質問がすごく多い。だから、「食べ物

を食べさせてください。」「食べ物で栄養を摂らせてください。」と一生懸命言うんですって（笑）。

言葉の場合も、「言葉を食べさせてください。」ではないですが、きちんとした言葉を与えているかどうか考えさせられます。家庭の中で、親がどのくらい言葉に関心をもっているかによって、子どもの興味は相当変わってしまうだろうと思いますね。

中西　おっしゃるとおりですね。わたしは小学生と中学生に「万葉集」を教えているのですが、彼らの言語力は驚くべきレベルだと思います。

例えば、「石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも」という喜びの歌があります。喜びというのは人間の感情で、植物が喜んでいるというのはおかしいね、では何が共通しているんだろうと問うと、「いのち」と言うのです。子どもからこのような言葉が出てくるという意味では、彼らの言語力はものすごく信頼すべきだと思いますよ。



甲斐　「いのち」ですか。なるほど。

中西　例えば、今の歌の題を隠して、「悲しみ」「怒り」「喜び」「楽しみ」から選ばせる。「楽しみの歌だ」という子もたくさんいます。



そうすると、今度は「楽しむ」と「喜ぶ」の違いを考えるようになる。大事なのは、子どもたちに「それはこうなんだよ。」という押し付けを絶対にしないことだと思いますね。

国語の力とは何か

甲斐　最近、文化審議会で「国語力」ということを話題にしました。そして新しく、「国語力」を上部

と下部の二重構造で示したのです。上部構造は、いわゆる「話す」「聞く」「書く」「読む」というような言語活動能力です。一方、下部構造には、それらの言語活動能力を支える基盤になるものとして、広い意味での語彙力や、知識・情報というものを置きました。これらの力を育てるために、読書をしましょう、古典を読みましょう、また翻訳などの名作も読みましょう、できるだけたくさんいろいろなものに体当たりしていきましょう、ということが提案されました。



中西 進（なかにし すすむ）

1929年、東京生まれ。京都市立芸術大学長。奈良県立万葉文化館長。2003年度から「中西進の万葉みらい塾」を実施し、自ら小・中学校に出向いて子どもたちに『万葉集』を中心とした古代の心の豊かさを伝えている。主な著書に、『日本人のこころ』（大修館書店）、『中西進万葉論集』（全8巻 講談社）、『日本人の忘れもの1・2・3』（ウェッジ）など多数。

中西　その下部構造は基本のものだと思いますね。そこで、わたしが大切だと思うのはイマジネーションです。例えば、文明は何によって伝わるかというと、イマジネーションだと思うのです。ワインを知らない人間が「これはワインだ。」と言われたときに、ワインってなんだろう、おいしそうだな、飲んでみよう、と想像してみる。そうして初めてワイン文明が伝わってくるでしょう。これはつまらないと言って想像することをやめてしまったら、文明は全然伝わらない。

つまり、我々の生活の知的レベルを向上させるのは、すべて想像力、イマジネーションです。認識の獲得もそうだと思います。やはりイマジネーションの力を、言語を通して養うべきではないでしょうか。

甲斐　おっしゃるとおりですね。

実は、言語活動能力のところで「想像する力」を入れています。

神津　アンケートで、「説教された」ということをなんと言うか調査したことがありました。三十年くらい前だと、怒られる、叱られる、説教される、戒められる、咎められる、お目玉を食らう、雷を落とされる、小言を言われる、諭される……とたくさん出てきた。今は、せいぜい「怒られる」とか「説教される」くらいで、「叱られる」という語彙もかつてに比べれば使われなくなった。力のある一つの大きな言葉にどんどん集約されてしまったという感じが強いですね。

甲斐　そうですね。

神津　父に叱られたのも戒められたのも小言を言われたのも、何もかも「昨日、怒られちゃってね。」と言えば済んでしまいます。しかし、言い回しが十個くらいあると、どの言葉を使うかを考える。それはつまり、昨日父がわたしに言ったことはお目玉だったのか、諭しだったのかと考えることでもあるわけです。自分で認識をするということですね。

　言葉で表現できないことは、心の中でも認識できないということになってしまわないか。そう考えると、





今求められている国語の力とは、言葉のグラデーションをどのくらい表現できるか、ということにわたしは尽きるような気がしています。

甲斐　今の中学生には、たくさんの「言葉のポケット」をもって、そこにいろいろな言葉を詰め込んでほしいと思います。そして、大人がいろいろな意味で、日本語はこれだけ潤沢ですよということを示さないといけないと思いますね。

中学生に伝えておきたいこと

神津　最近、若い人たちの「耳能力」がとても落ちているような気がします。よく高校生や中学生に講演をするのですが、あとで質問をすると、話が理解できていないことが多い。耳で聞いて理解するということを、もう少し国語で培う時間がないものかと思います。

甲斐　日本では、聴解能力が訓練されていないところがあると思います。例えば、ラジオなどの朗読を静かに聞いて、内容を心の中で味わうような習慣ができるとよいでしょうね。

　こうした音声言語力をつけるには、まず音読です。例えば、『枕草子』の「春はあけぼの」の章段を音読して、春から夏、秋へと作者の感興がだんだんと高まり、冬に落ち着いてくるといった流れを感じてもらいたい。それが大人になってまた出てくるようになると、逆に聞く力もついてくるのではないかと思います。

中西　わたしは、ぜひ詩の暗誦から始めてほしい。ロシアはプーシキンの詩を暗誦するでしょう。ドイツはゲーテの詩から入る。我々の場合は百人一首でした。なんだか知らないうちに身についていますから、ふっと出てきます。

　さらに最近思うのは、もっと民話を大事にしてほしいということです。民話には温かさや日本人の歴史、それに理屈もあるのです。



神津 カンナ（こうづ かんな）

1958年、東京都生まれ。作家・エッセイスト。作曲家の神津善行、女優の中村メイコの長女。1977年渡米し、演劇を学ぶ。帰国後に発表した『親離れするとき読む本』（集英社）が、体験をもとにした家族論として話題になり、ベストセラーとなる。主な著書に、『美人女優』（集英社）、『あの人はなぜ好かれるのだろう？ なぜ素敵になったのだろう？』（三笠書房）など多数。

こうしたことを教えることでよみがえってくる言語の豊かさというものがあると思います。

甲斐　それに加えて言えば、漢詩文、特に漢文ですね。漢文というのは、中国で生まれた作品を、日本人が日本語で読み解いたものだと思います。ずっと育てて守ってきたものを、今は軽視しようとしているんです。中学生には、ぜひとも論語や漢詩を素材に学習させたいと思っています。

中西　鷗外とか漱石は漢文脈で、太宰治は和文脈の作家です。司馬遼太郎さんも和文脈ですね。日本の文学にはそういう二つの流れがあって、我々はその両方を伝えていかないといけないですね。

甲斐　漢文脈、和文脈の両方を学習してもらうことによって、円満な現代人ができるのではないかと思います。言葉というのは、それぞれ、何百年、千何百年の経歴があるわけです。そういうことを知って、ちょっと廃れかかった言葉をもう一回生き返らせていくのは、とても大事なことだと思いますね。



中西　言葉は、時代の変遷などと関係なくよみがえるものもあります。一方で、勝手に新しいバージョンを作ってもいいわけです。もっと自由にいきいきとした言語を使ってほしいものですね。



幹が太くなれば、木は高くなる

神津　前にどこかの学校の先生と話しているときに、本を読むのは受信一方なので、子どもにはもっと発信をさせたい、という話がありました。美術でも絵を描き、音楽でも演奏する。国語でも書いたりしゃべったりさせたいと。もちろんそれらは大切なことですが、絵を鑑賞する、音楽を鑑賞する、本を読むといった「受ける」ということの教育が、いつのころからか軽んじられてきているような気がするのです。



甲斐睦朗　（かい むつろう）

1939年、台湾生まれ。独立行政法人国立国語研究所長。中央教育審議会国語専門部会主査、文化審議会国語分科会委員も務め、国民の言語生活の向上に力を注ぐ。主な著書に、『わかむらさき ― 源氏物語の源流を求めて』（明治書院）、『文学教材の読み方と実際』（明治図書）などがある。光村図書の小・中学校国語教科書編集委員を務める。

中西　例えば、アンソロジーを作るのは、選ぶということでしょう。こちらからなんの発言もしないけれども、選ぶということにおいては受け取ったものを表現している。それと同じですよ。読むことは、そこで何か言わなくても、それを受け入れることによって、発信体は太っていくわけです。

甲斐　先ほどの下部構造ですが、基礎的な部分をできるだけ貪欲に膨らませていくことが、その人の人間形成にも関係してくるのではないかと思います。

神津　広げておけば、あとはいくらでも応用できますものね。

中西　木と同じですよ。木は、高くなるためには幹が太くないといけないのですからね。

この鼎談は、光村図書ホームページ「光村チャンネル」の「シーズン・メッセージ」に掲載されています。
（二〇〇五年一月～三月）
http://www.mitsumura-tosho.co.jp/